

## 教育心理学教室教官の研究状況報告

### 研究経過報告 ——'88年秋～'89年夏——

小 嶋 秀 夫

この1年のうちに何らかの形で成果の出た活動から報告する。

まず、ISSBD（国際行動発達学会）第10回大会（フィンランド、ユヴァスキュラ）で、「近世日本における家族生活と子どもの発達」と題した招待講演をした。それは、当時の社会的背景、子育て論の展開、そして、桑名日記・柏崎日記の分析結果を扱ったものであったが、幸いにかんがりの関心をもってもらえ、来年に西ドイツで出る学術誌に掲載されることとなった。

また ISSBD では、かねてから若井邦夫氏（神戸大学）、松田惺氏（愛知教育大学）とともに、コーネル大学の U・ブロンフェンブレンナー、S・ハミルトン氏らと共同で行っている研究の日本側のデータの一部が、若井氏を筆頭としたポスターとして発表された。これは、幼児期以来の人とのかかわりの経験と、知的・人格的発達に関する研究であって、私の枠組みの中では、「社会的相互作用と発達」の研究として位置づけられるものである。

その後西ドイツに渡り、アウグスブルク、レーゲンスブルクの図書館や美術館で歴史研究にかかわる調査をするとともに、レーゲンスブルク大学では、コロキアム（Grossmann 教授）で、筆者が開発している LCS-D（Life Course Study through Drawing）法の話をした。心理学研究者のほかに、エソロジストや芸術家が話を聞きにきてくれた。

【乳幼児の社会的世界の研究】 かなり以前に開始した乳幼児のきょうだい関係の研究に加えて、仲間関係、ナチュラルな発達、そして自己の発達に関する研究成果が私の周囲である程度蓄積された。その成果と残された課題とを一般の読者に伝達するために、『乳幼児の社会的世界』という本を編集していたが、それが間もなく有斐閣から出る予定である。なお、それには、われわれの研究の他に、研究交流をしてきた M・ルーウィス（R・

W・ジョンソン医学部、UMDNJ）と、A・フォーゲル（ユタ大学）+G・F・メルソン（パーデュー大学）による論文も含まれている。

【子育ての歴史的研究】 ここ12年以上に亘って、途切れ途切れに続けてきた子育てにつながる児童発達観の領域での研究を集めたものが、近く1冊の本として出ることとなった（新曜社）。『子育ての伝統を訪ねて』と題したこの本には、現在の時点でもなお探索を続けている事項が含まれていて、まだまだ分からないことが山積している。また、思わぬ間違いを冒している可能性も十分にある。しかし、取りあえず、これまでの自分の歩みを記した。この本は、当初の構想と比較すると、章の数を半分以下に削ったものである。将来、残りの部分を別にまとめられるかどうかは分からない。

この領域ではその他に、2つの論文が現れている。すなわち、「わが国近世以降の家庭養育態度——その連続性と変容——」、星野 命（編）『講座家族心理学1』、金子書房、1989；「しつけの時代差」、依田 明（編）『性格心理学新講座2』、金子書房、1989。

また、前年に予告した2つの論文も、それぞれ現れた。「わが国における母子関係の歴史的考察」『心理学評論』、1988、31、20-31。；「明治初期の翻訳育児書」『日本医史学雑誌』、1989、35、27-45。

【その他】 親における養護性の発達と、日本の子どものアチーブメントの背景に関する論文が、1つずつ現れた。「親となる心の準備」繁多進・大日向雅美（編）『母性』、新曜社、1988。；The role of belief-value systems related to child-rearing and education: The case of early modern to modern Japan. In D. Sinha & H. S. R. Kao (Eds.), *Social values and development: Asian perspectives*. New Delhi: Sage, 1988. Pp.227-253.

(1989年8月8日)